【2024年度地域連携事業費活動報告】

こどもの感性と創造性を育む
五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発Ⅲ

代表者：鈴木光男（国際教育学部教授）
協力者・連携機関：坂田芳乃（アルテ・プラーサ代表） 藤田雅也（静岡県立大学短期大学部 教授） 筧 有子（浜松学院大学 准教授） 島口直弥（浜松市美術館 指導主事） 渡川智子 （国立京都近代美術館 学芸員）
山中 悠 （静岡市美術館 臨時職員 学芸員） 鈴木海斗 （GoldenJunk 代表アーティスト）

【経緯】一昨年度から「感覚を活かしたこどもの表現活動としてのアートプログラム」を協力者らとともに開発する研究会を開催し、事例を基にアートプログラムの開発とモデル事業を実施してきた。その成果については、2023年8月の日本美術教育学会にて発表した。その後は、浜松みをつくし特別支援学校や磐田市地域づくり協議会と連携・協力しシャッターアート制作にも取り組んだ。2024年度は、ここまでに得られた知見をもとに、スクールミュージアムというプログラムを核に試行実践し、その成果や課題を整理し、その他の地域や保育・教育現場に密着した事業が展開できるようにしていこうと考えている。

【期待される効果・成果】県内東部・中部・西部各地に広げるための「美的経験によるアートプログラム」の先行モデルとして、まずは三島市内の学校で実践を展開する。その成果と課題を整理し、保育・教育現場で具体的に実践できるように一つのパッケージとして提案する。こうした提案は、障がいのあるなしに関係なく全ての教育・保育現場での活用に大いに寄与するものと考える。 また、外部の団体やアーティストと共に活動することで、協働・参画する学生たちの意識が保育者・支援者・教育者として転換していくことが期待できる。

【目的】不透明な時代を生きる子供には「何かを生み出し新しいものを創りだす創造性」が求められている。子供は本来、五感を駆使して自らの世界を認識し出会う世界を広げていく。しかし、DX化社会では間接的な体験が増え、直接感覚を刺激する機会が減少している。次世代を担う子供たちに「五感をとおした美的経験」をもとに日常的に感性と創造性を育む環境・機会を提供する。子供が体験等を通じて、感覚から感じたことを表現し対話することにより、様々な見方があることを知ると同時に自由で独創的な発想を育み、将来の多様な世界への視野を広げられるよう、未来の人づくりを応援する。

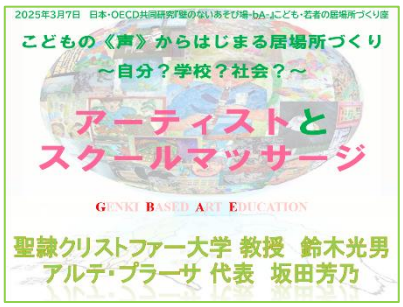
【事業概要】本年度の核となる事業「スクールミュージアム」は、アーティストの作品を小学校で2週間展示し、子供がアートに身近で接する機会を創出するものだ。作品展示・鑑賞だけではなく、アーティストと直接関わり作品に関する交流の場も設ける。作品を鑑賞するにとどまらず、作品を子供たちの思いや考えで展示したり、障がいのある子供たちにも作品製作の機会を提供したりして、様々なアートプログラムの提案をする。モデル事業として三島市の小学校で実践し、その成果を県内の校長会や教育委員会などに配布し普及・啓発活動を行うことを想定している。

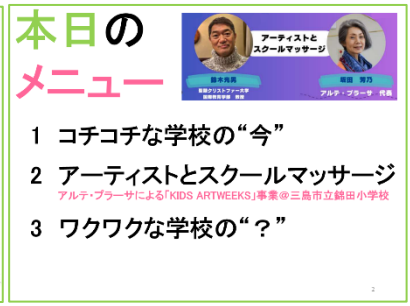
■実　施　内　容：KIDS ART WEEKS とは、アーティストと子供を出会わせる企画や事業を公立小学校で2週間に渡って展開するものである。参加・協力したアーティストと主催団体のアルテ・プラーサ、そして研究者とで事前・事後で協議を重ね、参与観察記録・振り返りを共有することで、様々な学校で同様の活動を展開できるようアートプログラム開発に資する知見を得るものである。なお、下の表1は2024年度KIDS ART WEEKSのスケジュールである。

表1　本事業に関わる2024年度KIDS ART WEEKSスケジュール

開催日	概　　要	展示・WS等の開催予定
1/8～10	アーティスト作品展示準備 （アーティスト） 白砂勝敏　　ナガタトシヒロ　奥村祐喜　永冶晃子	作品搬入・展示準備（決定） 2025年1月8日（水） ～10日（金）9:00～16:30
1/14～24	作品展示・ワークショップ・アーティストトーク他	1/24は撤去
1/14	自由鑑賞 先生に向けた作品解説（未定） アーティスト4人（未定）	1月14日（火）（教師用） 15：00～
1/14～23 昼休み等	展示作品を鑑賞し、子供たちが学校内で「これもアート」だと思えるものを探検する。	
1/15～17	子供に向けたアーティストトーク	対象と開催日を学校と相談
～23	卒業作品制作	
	対話型鑑賞 ・ベラスケス「ラスメニーナス」他 講師　渡邊千春（清水中講師）	対象　5年生3クラス
1/15・16	即興演奏＋動詩「三年とうげ」と美術表現 演奏：白砂勝敏 動詩：奥野晃士 表現：永冶晃子・二村有音 ＊3・4年生全員（約160名）で体験 ＊会場は体育館	・3・4年生全員 ・即興演奏＋動詩「三年とうげ」20～30分 ・美術表現60分程度
1/14	即興演奏＋動詩と表現 演奏：白砂勝敏　動詩：奥野晃士 表現：奥村祐喜 ・会場は体育館、多目的室、廊下	
1/24	展示作品撤去作業	

公立小学校を会場とした2週間に渡る今回の事業は、初めての試みであり、国内外で注目を集めるものとなった。
2025年3月7日(金)の日本OECD共同研究オンラインセミナー『こどもの《声》から始まる居場所づくり～自分？学校？社会？』では、本事業協力者の坂田（アルテ・プラーサ代表）と本事業代表者 鈴木で「アーティストとスクールマッサージ」というタイトルで事業報告・研究発表を行った。





硬直化しがちな小学校教育の現場にアーティストが関わり、作品を展示し、パフォーマンスを披露し、時に子供を巻き込み、そして対話・交流することで、これまで以上の造形的な雰囲気に満ちた学校に変わっていった。その一端を日本OECD共同研究のオンラインセミナーでは発表した。以下は、この事業の具体的な取り組みの紹介をする。

ＫＩＤＳ　ＡＲＴ　ＷＥＥＫＳ ＠三島市立錦田小学校

■開　催　期　間：2025年1月14日(火)～2025年1月24日(金)

参加アーティスト：

①白砂勝敏　音楽を奏で身近な材料による立体造形を専門とする。いずれも独学。20代は造園業の傍ら放浪。白砂の中で音楽と美術は表裏一体で、木・竹・土・石・廃品等から「創造の泉」を掘り当て新しい生命を与える。野外展示作品制作は得意な分野である。

②ナガタトシヒロ　富士宮市を拠点に活動。立体と平面を巧みに組み合わせた作品を制作。作品は物語性に富んでおり、ウサギや豚の人形がキャンバスから飛び出すように配置されている一方 で、どこか不気味さも感じさせる作品。富士宮市でアート教室主宰。

③奥村祐喜　沼津市の芸術家グループ「風土」に属し、年2回グループ展を開催。2021～23年まで県立美術館教育普及担当。現在は、沼津市立金岡中学校美術教師であり、子供が触れることができる作品づくりに努め、芸術教育の視点を持つ数少ないアーティスト。

④永冶晃子　これまでのアートワークショップ等での子供の作品をインスタレーションとして表現する。または、アーティストの作品と子どもの作品をコラボした表現を試みる。

⑤二村有音　自然物を使った平面、立体、インスタレーション作品制作。東京外国語大学外国語学部スペイン語学科在学中にバルセロナ大学美術学部1年間留学。2006年同大学卒業、2008年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。

⑥奥野晃士　SPAC-静岡県舞台芸術センターに所属したことをきっかけに静岡を活動拠点に。2014年よりスイスに移住し、舞台演出、出演の他、演劇講師としても高く評価される。18年には静岡県立大学より地域みらいづくりフェローの称号を授与される。

■事　業　概　要：

①地域のアーティストが応援！作品展示とトーク・鑑賞授業～旅する美術館「錦田小美術館」～

写真１　ランチルームが「錦田小美術館」に変身

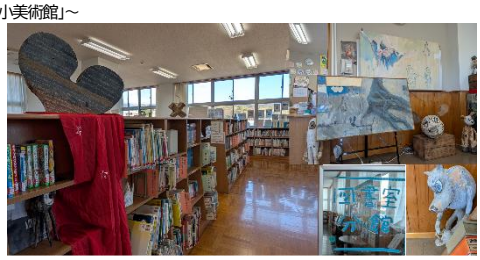


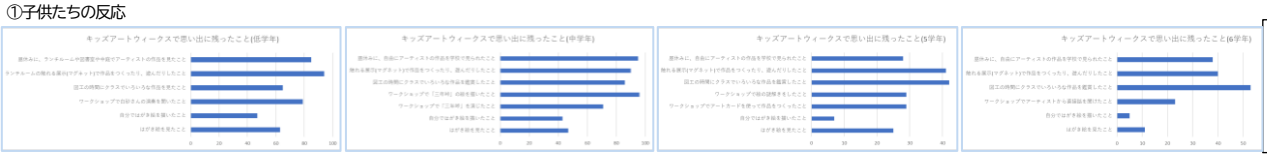
写真２　図書室は「美術館分館」

写真３　日常的に作品やアーティストと交流

※写真1～3は、上のOECD共同研究オンラインセミナーで坂田氏がプレゼン資料内で使用したものである。

■事後の振り返り：アルテ・プラーサから提供されたアンケート結果から

①子供たちの反応



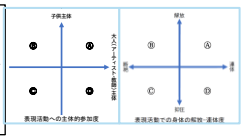
⇒**低中学年**では「触れる展示で作品をつくったり遊んだりしたこと」「三年峠の絵を描いたこと」といった思うままに表現活動したことが多くなっている。**高学年**では、「図工の時間にクラスでいろいろな作品を鑑賞したこと」が最も多くなっている。**子供自ら遊び、自身のアート文化をつくりだすことに関心のある低中学年**までと、**既存のアート文化に関心を寄せ始める高学年**との違いがうかがえる。

②先生たちの反応

⇒会場となった錦田小学校の先生たちは、本事業に対して**非常に好意的な評価**をしている。「子供が本物の作品を直接鑑賞することができた」以上に、「子供がアーティストとふれあえた」ことに対する評価が高い。これだけの期間、複数のアーティストが学校に在中し、自身の作品やパフォーマンスを子供たちに披露する取り組みは非常に珍しいことで、近年多化化が指摘されている学校現場にあっても、**先生たちは子供たちに価値ある経験や多様な人とのふれ合いを求めている**ということが分かる。しかし、「今後の学習活動の参考になった」ということについては、否定的な評価は見られないものの「大変評価する」はそれほど多くない。これは、自由記述に見られた「持続可能なかたちにするには、どの学校でも対応できる方策を考えないといけない」「アーティストがやりたいことの意図が伝わっていなかったので、どう子供たちに声をかけていいか迷った」「教頭先生への負担が多かった」といった**学校側の負担や活動内容・ねらいの明確化と共有化**といったことに対する懸念が影響しているものと思われる。
なお、質問項目にある「本物の作品」にはいささかの違和感がある。アーティストと子供が生み出す作品を区別しているような印象を受け、子供の作品に対する眼差しの偏りを感じてしまうところである。

③参与観察等を通した分析と考察

○会場となった錦田小学校は本事業に関わらず、以前から造形的な雰囲気に満ちた学校であったように感じられた。新校舎建設当時からアーティストの作品が展示され、どの学年の廊下にも十分な広さのあるオープンスペースがあり、そこは様々な材料や用具が豊富に準備されていて、いつでも造形活動が展開できるようになっている。その横には作業台・展示台としての机も置かれ、子供や先生が作業しやすい・鑑賞しやすい環境設定がなされていた。廊下も多目的に使えるだけの広さがあり、学年での表現活動や探究学習が展開しやすい環境であった。
○廊下にはピクチャーレールが設置され、子供たちが思いのままに自由に表現を追求した作品が展示されていた。他の学校ではあまり見られない ほどの個性あふれる豊かな内容の作品が多く見られた。
○3・4年生の『三年とうげ』に関わる描画活動では、どの子も思いのままに支持体となる封筒に表現を展開していた。その封筒を両手に被せ、身体表現をする段階では子供たちの動きに少しばかり戸惑 いが見られた。どう展開するのかに課題が感じられた。封筒を破き頭や身体に巻き付けた子の身体表現は楽しさにあふれていた。また、鑑賞の授業では、休み時間の自由な鑑賞経験をもとに対話型の授業がなされればと惜しい感じがした。子供の思いや生活経験に立脚した対話型鑑賞の授業展開、教師の受け止めと引き出す関わり方が今後の課題である。
○本事業で展開された活動は、右図のAを目指したものであったろうが、まだ初めての試行的な実践で子供は大人からの働き掛けを受けて立場となっている場面が見られた。いかにして身体を解放し、連体し、共鳴する身体の形成を実現することと合わせて、この点も課題の一つである。
○これからのAI社会の到来を前に、100年前とは異なる意味でこのようなアートを軸に据えた小学校教育の展開に挑戦し実現させたことの意義は大きい。国の内外で注目を集める教育実践の一つと言っても過言ではないほど刺激らしいものであった。関わられたアルテ・プラーサ、アーティスト、学校関係者に敬意を表したい。



■成果と課題：

○今回のKIDS ART WEEKS事業のような音楽や立体造形、平面表現、演劇など総合的な芸術活動を採り入れた教育は、約100年前のシュタイナー教育やダルクローズの「リトミック」などとの共通性が見られる。時代や社会の背景は異なるものの子供の感性や創造性、社会性、身体性などへの関心と教育的な意義を見出そうとする意志が感じられる。こうしたことを踏まえて整理すると、KIDS ART WEEKSの教育的なキーワードは「身体の解放・連体」と「共鳴する身体の形成」となる。このようなことから、アートプログラム開発のベースには、以下の教育的な眼差しがその根底となるものとして位置づけられる。

- **「身体の解放」を前提とした自発的な活動であり、自由な自己表現が保障された活動である。**
- **「身体の連体」を前提とした主体的な活動であり、他者と共に表現を創造する活動である。**
- **「共鳴する身体の形成」を企図した活動であり、子供も大人（アーティストや教師）も双原因性感覚を軸としたアートを展開する活動である。**

○カリキュラムは、低学年で**「あそぶ」**、中学年で**「（子供ならではの）アート文化を）つくる」**、高学年で**「（既存のアート文化に）いどむ」**といった段階が考えられる。
○AI社会を前に、これまで以上に**手間暇かけて文化（CULTURE）をつくる学校教育**が望まれる。その意味において、今回のKIDS ART WEEKS事業は大いなる教育的な意味や価値がある。
○硬直化した現在の学校教育ではいじめや不登校が年々増加している。このような状況を改善し、**学校教育そのもののパラダイムを転換する可能性**を秘めている。また、日本の教師が持つ固定型のマインドセット（子供を制御・コントロールしがち）を、**成長型のマインドセットに改変する可能性**もあると言えるだろう。